大貫良夫，落合一泰，国本伊代，
恒川惠市，松下洋，福嶋正徳 監修

『[新版] ラテンアメリカを知る事典』

平凡社　2013年　694ページ

本書は，1987年に第一版，1999年に第二版が出ている『ラテンアメリカを知る事典』の内容を大幅に改訂した新版である。政治，経済，社会の分野をはじめ，歴史，地理，音楽，文学，人物，風俗，国際・地域機関など1200を超える項目にわたり，200人近い専門家が執筆に参画している。

監修者代表（恒川）は，第一版が出された1987年に比べ，ラテンアメリカでは民主主義が定着し，経済面では債務危機を乗り越え，自由化を進めてグローバル化に対応していることに言及し，四半世紀を経てラテンアメリカが大きく変化したことを指摘している。他方，所得格差は改善していない国が多く，資源輸出に依存した経済構造も変わっていない。政治面でも，カリスマ的な個人に統治をゆだねる政治文化が目立つ国も多い。この25年で変わったことと，変わらなかったことがあると結論しつつ，現在資源輸出に依存した経済成長がみられるラテンアメリカが，今後どうなっていくのかを展望している。経済面だけでなく，文化面でもグローバル化が進展するこの地域が今後民主主義を守りつつ，ローカルな文化を守り発展させることができるかどうかが問われているとしている。

初版以来25年ぶりの大改訂となったこの新版は，ラテンアメリカに関心を持つ学生や，その他一般の人々の関心に応えるだけでなく，ラテンアメリカの専門家の用にも耐えるものである。旧版と同様，豊富な写真やイラストが掲載されており，項目の理解を助けている。ラテンアメリカ各国の国別項目は後ろにまとめられており，ブラジルからカリブ海の小国まですべての独立国が取り上げられている。膨大な項目を整理・検討された監修者と編集担当者の労がしのばれる。（山岡加奈子）

フィデル・カストロ・ルス 著
山岡加奈子･田中高･工藤多香子･富田君子 訳

『フィデル・カストロ自伝 ―勝利のための戦略― キューバ革命の闘い』

明石書店　2012年　628ページ

本書は2010年に出版されたフィデル・カストロ初の自伝 *La visctoria estratégica: por todos los caminos de la Sierra* の全訳である。カストロが海外のジャーナリストなどの質問に答えた伝記はいくつかあるが，彼自身が執筆したものはこれが最初である。2006年に手術入院したときも，病院のベッドでこの本の推敲に余念がなかったという。

序章で彼の生い立ちや学生時代などが語られ，残りの25章でキューバ革命勝利の前年である1958年3月から8月までの半年間のゲリラ闘争が取り上げられている。キューバ国内のジャーナリストが，著者の記憶を裏づける一次資料の収集や聞き取り調査を行った。その資料の一部や当時の写真，戦闘が行われた地点を示す地図なども掲載されている。また，原書にはないが本文に頻繁に出てくる自動小銃や臼砲など，今の日本人にはあまりなじみがない兵器その他の資料も巻末に掲載されている。

カストロ自身の筆による初の自伝としての史料的価値はもちろんだが，彼が当時何を問題とし，何を目標にして戦っていたのかが理解できることが本書の強みである。他方，カストロたちのグループが優勢になってからの時期を取り上げているので，それ以前の闘争については触れられていない。カストロとしては，最も人に語りたい時期を選んで出したというところだろうか。

なお，この本の続編 *La contraofensiva estratégica: de la Sierra Mestra a Santiago de Cuba* が同じ国家評議会出版局から出ており，革命勝利の1959年元旦までを取り上げている。こちらも明石書店から翻訳出版される予定である。（山岡加奈子）

小倉英敬 著

『マリアテギとアヤ・デ・ラ・トーレ 1920年代ペルー社会思想史試論』

新泉社　2012年　219+ixページ

マリアテギは，ラテンアメリカの独創的なマルクス主義者であり，アヤ・デ・ラ・トーレは，ラテンアメリカのポピュリズムの一つであるアプリスモの創始者である。著者は，ウォーラシュタインの世界システム論の修正，現代化を目指す立場から，世界資本主義システムの周辺部への浸透は，先進資本主義諸国とは異なる社会構造をもたらし，その結果，特有の大衆社会が形成され，それに対応した大衆運動がもたらされるとする。本書では，その典型例としての1920年代のペルーのなかに，マリアテギとアヤ・デ・ラ・トーレの思想と運動が位置づけられ，その歴史的意味が問われる。

1870年代は，ヨーロッパ資本主義の帝国主義的な傾向が明確になり，こうしたグローバルな資本主義の展開は，20世紀に入ると，1917年のロシア革命や植民地における独立運動をもたらす。ラテンアメリカ各国においても，このような国際環境の中で，19世紀初めの独立後も続いた大土地所有層による寡頭支配の変革，国民国家的な発展を求める運動が，新たに活発化した。ここでは，社会主義，ポピュリズム，あるいは寡頭制の継続，という3つの歴史的選択があった。

本書では，マリアテギの思想形成過程（第2章），彼によるペルー社会党の創設，国際共産主義運動組織コミンテルンとの対立（第4章），クスコにおける共産主義グループの形成とマリアテギの関係（第5章），アヤ・デ・ラ・トーレの思想形成とアプラ運動の形成過程（第3章），1930年代のペルー・アプラ党（第7章），などが扱われる。

1930年のマリアテギの死後，社会党はコミンテルンの指導のもと，極左的な共産党へと改編され，影響力を弱めていった。他方，メキシコ革命に範をとったアプラ党は，一時は勢力伸張に成功したが，実際に政権につくのは結成以来54年後となった。

（米村明夫）

村上勇介·仙石学 編著

『ネオリベラリズムの実践現場 ―中東欧・ロシアとラテンアメリカ』

京都大学学術出版会　2013年3月
358+viiページ

本書は，2008年から開始された「中東欧とラテンアメリカのいまを比較する」プロジェクトおよび文部省科学研究費による「ラテンアメリカと中東欧の政治変動比較―民主主義の定着過程の比較動態分析」プロジェクトの成果の一環である。序章と終章以外の論稿は，研究会での報告を基にしつつ，そこでの議論や新たに浮かび上がった視点を踏まえながら執筆されたものである。本書の構成は次の通りである。

第1部の「自由主義思考経済学の伝播」では，ロシア（外国人アドバイザー）とチリ（シカゴ·ボーイズ）の各事例をもとに，ネオリベラリズムの考え方が伝播した経路が分析される。第2部「政治過程に対するネオリベラリズムの影響」では，エストニアやスロヴァキアの事例や両地域内での比較分析から，ネオリベラリズムのもとでの政治社会や政党政治，または国民の政治志向の変化などについて論じられる。そして第3部の「ネオリベラル的経済運営の実態」では，BRICSに含まれるロシアとブラジルを対象に，「ネオリベラリズム」が政策としていかに具現化し，いかなるインパクトをもたらすのかが論究されている。

こうした議論を通して，本書では「ネオリベラリズムの実践」の側面に焦点を合わせ，その「波及」過程や政策実施に際した政治プロセスの共通性や相違性，また，こうした「実践」が具体的に何をもたらしたのかの解明が試みられている。ただ「はしがき」にも示唆され，このプロジェクトに参加した評者としても悔やまれる点は，両地域を横断した地域間比較分析の論稿等がなかったことである。むろん，各地域の歴史的コンテクストの拘束性や各国のユニットとしての同質性など，クリアしなければならない問題は多いが（これは地域内比較でも同じ），量的・質的問わずさまざまな分析手法を駆使しうる現在，そうした比較分析が行われる価値は大いにあるだろう。評者個人的にも，こうした試みには今後是非挑戦してみたいと思っている。

（上谷直克）